

のたんのうという言葉の説明に、親神様のお働き、あるいは、親神様の思召、と言う言葉が出てこなかったら、それはただの毎日の心がけの話になってしまうのではないか、と思います。

お道の教えを、未だ知らない人達に説明をする際に、わざと意識をして親神様のお働きや思召に触れない説明の仕方をする必要があるかもしれません。時にはそうした説明をした方が相手の方に理解してもらいやすい、ということもあると思います。しかしながら、それがいつもそういう説明をしておりますと、そうした説明の仕方が当たり前になってしまう、説明する側の者が、お道の言葉本来の意味を忘れてしまう、あるいは、長い間それを繰り返すことによつて思い違いをすることになつてしまう恐れがあるのではないかと心配をします。

### ◆親神様の大きな親心◆

毎日の暮らしの中では、嫌な事に出合うこともあり、そうした時に、少しも喜ばなくなってしまうということもあれば、身上や事情に出合うこ

とで心が乱れてしまうということもあります。そうした色々な道中にあつても、身の周りに現れて来ることは、全て親神様が自分にお見せ下さつていることなのだと思ひ、心を倒すことの無いように、喜び勇んで暮らしていく。この心の治め方が、たんのうだと思います。

親神様は、我が子である私達人間を、可愛く、ひたすらたすけてやりたいと思つて下さつているのであります。人間の親と子の関係を考えてみても、親というものは自分の子供を何とか幸せにしてやりたい、何とか一人前にしてやりたい、守つてやりたい、たすけてやりたいなど、子供のことにすると皆必死に思うものだと考えます。それと同じように、親神様・教祖は、常に我が子である私たちのことを考えて下さつているので、そう信じるのであります。

神様なのに人間を辛い目に遭わせるのか、というようになことを言われることもありま

時があります。また、厳しいことも言わねばならない時があるのであります。親神様は、私達人間がこのまま何も気が付かずそのまま進んで行つたら、危ないことになるのに、この子は何にも気づいていない、と思えば、少々痛みを伴わせてでも、たすけようとして下さつていのではないのでしょうか。

子供である私たちお互いは、一人一人、別の人間でありますから、当然危ないことに合うタイミングが異なることもあるでしょうし、言うことを聞きやすい、効果的な注意の仕方というものも、人によつて違うこともあるのであります。ですから、親神様は、そこをよく見極めて、その子供にふさわしい形でお見せ下さる。その子にできるだけ分かる形で、気づきやすい形でお見せ下さるのだと思つて、だから、我々からすれば、自分だけが何でこんなことを見せられなければならんのか、と思つようなことにぶつかつても、実はそこに、そういう思いが潜んでいるのではないかと考えます。そうしたこと

に気が付けば、何が起つても、何に出合つても心配はいらないと思ひます。

### ◆信仰しても苦難に出会うのはなぜか◆

お道を信仰していれば、辛いことや苦しいことに出合わずに済むのか、といえは、決してそんなことはないように思ひます。これまでの人生で積んできたほこりの心遣い、自分自身が持つて生まれた癖・性分、前生や前々生など、長い間に積んできたいんねんというものが誰にでもあるのであります。ちよつと雑な言い方になるかもしれませんが、これまでに積んできた悪いところが積り重なり、今この時にこの子に見せておかなかつたら、この子のためにはならない、今改めさせておかなければとんでもないことになるという時には、親神様は必ずお見せ下さると思ひます。

何かのふしに出合つた時、これはこれからの私のために、お見せ下さつたことなのだ、今気付かせてくれることはありがたいことなのだ、あるいは、これは今私が通らなければならぬ道なのだ、という

ように悟つて通ることができているのが、私たちお道を信仰している者の強みだと思ひます。そして、たんのうの心を治めることで、親神様が、そうか、よくわかってくれたな、と喜んで下さり、いんねんを一つ一つ納消して下さるのではないかと考えるのです。

### ◆たんのうの難しさ◆

たんのうとは、こういうことだと知つていても、なかなかできないのがたんのうだと思つたのです。喜ばないことを喜ぶには、たんのうの心を治めるには、時間がかかると思つたのです。たんのうするためにはまず、何とか喜ぼう、何とかたんのうさせてもらおうという、自分がしなければならぬ努力というものが必ず求められると思ひます。そしてその求める努力をしていく中では、自らのこれまでの行いを振り返り、いんねんの自覚というものを行つていく努力が欠かせないことになつてまいります。そのためには、それ相応の間がかかつてもいいのではないのでしょうか。嫌なことや辛いことに出